

氏 名 島村 一平

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 194 号

学位授与の日付 平成 22 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 シャーマニズムによるエスニシティの探求—ポスト
社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を
中心として

論文審査委員 主 査 教授 中牧 弘充
教授 小長谷 有紀
准教授 新免 光比呂
教授 山田 孝子(京都大学)
名誉教授/館長 松原 正毅
(国立民族学博物館/坂の上の雲ミュージアム)

論文内容の要旨

本論は、モンゴル国に居住する少数集団であるブリヤート人（モンゴル・ブリヤート）のエスニックな帰属意識が、シャーマニズムによっていかに探求され、どのように再構築されているかを論じるものである。

ブリヤートは、バイカル湖周辺地域に居住し、狩猟や牧畜に従事しモンゴル語系の言語を話す集団である。17世紀後半より帝政ロシアの支配下に入ったが、20世紀初頭、ロシア人による牧草地の収奪やロシア革命による混乱を避けて、その一部が集団で国境を越え、外モンゴル（現在のモンゴル国）に移住、亡命を図った。しかしモンゴルに移住後、1930年代後半のスターリン粛清によって、ブリヤートは反革命・日本のスパイという理由で多くの者が逮捕され、銃殺刑に処された。

ロシア側に残ったブリヤート人は、ソ連の下で「モンゴル人」とは異なる別の「民族」として制度化されることとなった。その結果、ロシアのブリヤート人たち（ロシア・ブリヤート）は、文化的に親近性をもつモンゴル人より、ソ連的な意味で「文化的」かつ「文明化」した「民族」だと自己を想像することとなった。

一方、モンゴル人民共和国では、ブリヤート人たちは「モンゴル民族」内に属する少数エスニック集団だとされた。こうしてソ連とモンゴルという複数の国家によって矛盾した複数帰属が付与された結果、現在、ロシア・ブリヤートは、モンゴル・ブリヤートを純粋な「ブリヤート人」とは見なさず、自分たちより「文化的」ではない「モンゴル人」とみなしている。

さて、1990年代初頭の社会主義の崩壊以降、モンゴル・ブリヤートの間では、不思議な現象が起きている。精霊を憑霊させるタイプのシャーマンが次々と誕生し、その数は人口の1%に迫っているのである。実は社会主義以前、モンゴルに移住してくる前のアガ・ブリヤートの人々はほとんどが仏教徒だった。すなわち、シャーマンの増殖現象は、伝統の復活ではなくて、全く新しい現象だといえよう。

彼らは、好き好んでシャーマンになっているわけではない。大抵の場合、肉体的、精神的に不調が理由で病院などを訪れるが、原因がわからない。そして万策つきたとき「患者」は、シャーマンを訪ねる。これに対してシャーマンは「おまえは、オグにねだられているのだ。はやくシャーマンにならないと命はないぞ。」と宣告するのである。

ここで言う「オグ」とは、英語でいう《ルーツ》に近いニュアンスをもった語である。「オグがねだる」とは、偉大なルーツである先祖シャーマン霊が、「患者」にシャーマンになることを要求しているという意味である。そして、この「診断」を受け入れたとき、患者は「シャーマン」へと変貌していく。

ところでモンゴル・ブリヤート人たちは一般的に、この「オグ」を「父系系譜」やクラン名に関する知識という意味で使っている。現在、ブリヤート人はおよそ7-9代に及ぶ父系系譜の知識を持っている人が多い。離散と迫害の歴史が、彼らをしてのエスニックな集団の帰属意識を示す指標として父系系譜の記憶を編集的に維持させてきたと考えられる。

ところが、シャーマンたちの言う「オグ」とは、彼らの霊的ルーツ、すなわちシャーマンに憑霊する精霊のことであった。この精霊たちは、生前にシャーマンであった彼らの祖先の霊であるが、父の母方、母の母方、母の父の母方などといった多系的な祖霊である。

こうした「ルーツの病」は、ポスト社会主義における社会的混乱と深く関わっている。この時代は、「民主化」「市場経済」という標語の下に、社会主義時代に築き上げてきたものを極端に否定する方向へと走った時代でもあった。国营農場や牧畜協同組合といった社会システムは解体の道をたどり、人々は社会的な紐帯を一挙に喪失した。モンゴルにおいては、「ショック療法政策」と呼ばれた急激な民営化政策が、実施され、多くの失業者や貧困を生み出すこととなった。

このような社会的混乱の中、「ハルハ純血主義」が台頭することとなった。すなわち、首都において精神的傷害を持っている者が多かったり、仕事の能力の低い者が多かったりするのは、モンゴル人（≡ハルハ人）の純血が守られなかったからだという認識が蔓延し始めたのである。その結果、モンゴル人として「純血」ではない、非ハルハや漢民族などとのハーフたちは、「混血＝エルリーズ（*Erliz*）」と呼ばれ、政治や社会の場において、周縁に追いやられることとなった。

こうした動きは、モンゴル・ブリヤートたちの居住する地域にも波及した。ただし、モンゴル・ブリヤートの間では、ハルハ純血主義ではなく、ブリヤート純血主義という形をとった。当該地域では、郡の組織において「血が汚れて悪い出自を持つ者たちだからだ」という理由で、多くの人々が仕事を解雇された。「悪い血を持つ者」とは、系譜の記憶が確かでなく、ブリヤート人としての「資格」が疑わしい者たちのことである。しかし、現在のモンゴル・ブリヤートの中には、帝政ロシア末期のロシア人植民や、肅清による男性の虐殺による男性不足から、中国人やハルハ人との通婚が進んだ結果、「混血」となってしまう者が相当数ふくまれている。

実は、このような混血^{エルリーズ}たちが、学校や職場から排除された結果、「気がおかしく」なり、シャーマンとなっていたのである。彼らの受難は、ポスト社会主義モンゴル社会全体がルーツに執着する「ルーツ・シンドローム」に罹っていたことを物語っている。

こうしたルーツの病に陥った人々をモンゴル・ブリヤートのシャーマンたちは、新たなルーツを創造することで、「病」を癒していた。しかし、シャーマンが提供する処方箋としての「オグ」は、世俗レベルの「オグ」と意味レベルで大きくずらされている。世俗社会が呼ぶオグ＝ルーツとは、父系的・単系的ルーツのことである。ところが、シャーマンたちの「オグ」＝ルーツは、多系的な先祖シャーマン霊であった。ルーツの病に苦しむ、父系の記憶は定かではない者に対して、師匠シャーマンはイニシエーションを通じて、患者の母の母方や、父の母方の母方などといった多系的な先祖の中に「ブリヤートの偉大なシャーマン」の霊を発見していく。すなわち、多系的ルーツの発見によって、単系・父系のルーツの怪しい混血^{エルリーズ}の者の社会的な帰属が、正統化されていた。

さらにシャーマンたちは、ルーツ概念の持つ父系性という属性も溶解させていく。シャーマンたちは、女性の精霊を霊的ルーツとして創出したり、シャーマンの父系系譜の最も古い人物として女性の先祖を創出したりしていた。現在、大多数のモンゴル国民は、チングス・ハーンや父系系譜といった男根^{ツツ}原理でナショナリズムのイデオロギーを構築している。これに対して、モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムは、20世紀、苦難を味わってきた無名^{フノマス}の女性たちの象徴である「ホイモルの女房」をルーツとして想像していた。

単系から多系へ。男性性から女性性へ。シャーマンたちは、「オグ」という記号の意味を読み替えることで、現代モンゴル社会における「ルーツ」概念の意味の解体を図っている

のである。

こうした読み換えの延長線上には、社会主義時代に制度化された「民族」概念の意味の読み換えがあった。シャーマンたちが創出した多系の霊的ルーツは、ブリヤート人の他にロシア人、ハルハ・モンゴル人、トゥングース人といったマルチエスニックな存在だった。シャーマンたちは、そういったマルチエスニックな精霊をコントロールするが、人々からは「ブリヤートのシャーマン」だとされる。その一方で、シャーマンは「私はブリヤートのシャーマンでもあるが、ハルハ・モンゴルのシャーマンでもある」と語る。

すなわち、シャーマンたちは、自身の内部に宿す異種混濁性をブリヤート性に読みかえていると同時にその逆（ブリヤート性＝異種混濁性）とならしめていた。

さらにこうしたシャーマンの増殖は、現在、国境を超えた現象となっている。つまり、ロシア・ブリヤート人が、モンゴル・ブリヤートのシャーマンのもとに修行にやってきているのである。彼らは、シャーマニズムを通じて、モンゴル・ブリヤートを「真正なブリヤート文化」を維持している人々」と理解するようになっていた。

つまり、シャーマンたちは、制度によって線引きされたエスニックな境界線に滲みをいれたのである。以上のことから、モンゴル・ブリヤートの人々は、シャーマニズムを通じて、ネーションのような明確な境界をもった「想像の共同体」とは異なる、境界のあいまいな、《脱領土化したエスニシティ》を再構築しているといえよう。

(以上)

本論文は、ペレストロイカの波を受けて民主化したモンゴル国において、バイカル湖周辺地域から逃れて移住してきたモンゴル語系の少数民族集団であるブリヤート人（本論ではモンゴル国のブリヤートという意味でモンゴル・ブリヤートと称される）のあいだで、シャーマンが急激に増加するという 1990 年代の現象に着目し、シャーマニズムをとおしてエスニシティ（民族性、とくに出自と文化）を探求しようとする動向を研究した意欲的な論考である。

本論文は序章と終章を含めて 8 章から構成される。序章でまずシャーマンが急増している現象を紹介し、問題の所在がシャーマニズムによるエスニシティ研究であることを明確にしている。第 1 章でポスト社会主義研究およびエスニシティ研究の領域から研究史を整理して、本論を社会主義によって制度化された「民族」以降のポスト社会主義のエスニシティ論と位置づけ、我々意識に亀裂の入った異種混淆的なエスニシティのあり方を論じると述べている。第 2 章ではモンゴル・ブリヤートのシャーマニズムについて概要を説明し、第 3 章ではシャーマンたちの成巫の契機となる災因論が「オグ」と呼ばれる霊的ルーツにあることを明らかにした。

第 4 章では、シャーマンのルーツ創造に関する実態調査の成果を提示した。すなわち、モンゴル・ブリヤートは、スターリンの粛清時代、とりわけ 1937～38 年に成人男性の約半分が反革命分子ないし日本のスパイとして同じモンゴル系の政治指導者によって虐殺された。そのため、残された女性たちはモンゴル人（主としてマジョリティであるハルハ系）、中国人、あるいはロシア人と結婚するなどして社会的な生き残りをはかった。このことは、ブリヤート人が重視してきた父系系譜の断絶を意味していた。ところが、モンゴルにおける民主化以降の社会主義の放棄は、社会主義的生産体制の解体と社会的紐帯の喪失という新たなアイデンティティ・クライシスをもたらした。それに対応して多数派のモンゴル人のあいだでは「ハルハ純血主義」が台頭し、非ハルハ系や「混血」の人びとを政治的・社会的に排除し、周縁化していったので、かつて「混血」を余儀なくされたモンゴル・ブリヤート人は、独自にエスニックな出自を創出して親族的紐帯を再構築する必要に迫られた。こうした歴史的な文脈の中で、祖先霊を操作的に生み出すシャーマンの社会的意義が高まり、そうしたシャーマンが師匠として新たなシャーマンを連鎖的に生み出していく現象を描写した。

さらに第 5 章では、「女性」として想像される霊的ルーツの例として、シャーマンが語る伝説や精霊の召喚歌のなかで登場する「ホイモルの女房」をとりあげ、第 6 章では、国境を越えるシャーマニズムへと展開した。終章では、エスニシティ論として、社会主義時代に制度化された「民族」概念とは異なる、異種混淆的なエスニシティが紡ぎだされていることを明らかにした。

モンゴル・ブリヤートのあいだで男女を問わずシャーマンが増殖する現象は、上記のように、粛清によって喪失した父系系譜のエスニシティを回復しようとする活動の一環であり、シャーマニズムという超自然的手段によるエスニシティの再構築であると分析される。このことをモンゴル・ブリヤートがポスト社会主義時代に直面した困難に即して、長期のフィールドワークにもとづく豊富なデータを駆使して綿密に解明した点に、本論文の最大

の学術的意義がある。

とりわけ、「混血」によって失われた単系的・父系的な系譜をシャーマニズムが「オグ」という先祖シャーマン霊を多系的に創造したり、「ホイモルの女房」のような女性の先祖霊を創出したりすることによって修復する過程が仔細に論じられ、以下のような具体的な特徴を抽出したことに独自性が認められる。

まず第1に、社会主義期には抑圧され沈潜していたシャーマニズム的要素を活性化させ、社会主義的集団化のなかで壊滅的打撃を受けた親族的紐帯の回復をはかるべく、擬似的な父系的系譜関係を樹立する過程で、父系と母系の双方にかかわる多系的な霊的存在を創出する有力な手段となったこと。そのため「混血」の人が「オグ」ととらえられてシャーマンになり、先祖のなかに偉大なシャーマンの霊を発見し、巫病を癒す事例が多いことを明らかにした点。

第2に、霊的ルーツの「オグ」は男性とはかぎらず、女性の霊が重要な役割を果たしていることを解明したこと。換言すると、世俗のレベルでは父系として語られる「オグ」が、シャーマンのレベルでは多系的な先祖霊としてたちあられることを分別した点。

第3に、「ホイモルの女房」は家庭でまつられる唯一形象化した人形であるが、子供の守り神とされる一方、「ブリヤートの母」ともみなされ、混血児たちはその物語と祭祀を通して「ブリヤートの母」の系譜につながり、ブリヤートのエスニシティを獲得して、ブリヤート人として生きてゆくことが可能となった、と論じた点。

最後に、ブリヤートはロシア、モンゴル、中国の三ヵ国にまたがり、なかでもモンゴル・ブリヤートは積極的に越境して連帯を強める一方、ロシア・ブリヤートもモンゴルに巡礼し、高度な言語能力を駆使するシャーマンと出会い、失われたブリヤート語やブリヤート文化を再学習する機会としている。このような相互補完性をシャーマニズムが担い、もうひとつの「想像の共同体」としての新たなネットワークを紡ぎだし、その意味で「脱領土化したエスニシティ」を構築していると同時に、明確な境界をもった「集団」に回収されない「脱集団化したエスニシティ」を構築していると結論づけた点。

以上のように、本論文は失われた民族的ルーツを多系的に探求する運動としてシャーマニズムが果たしている役割を明確に捉えることに成功しており、それゆえに、従来の境界が明確なエスニシティ論とはことなった独創性を有している。ただし、エスニシティの探求に力点を置いたため、シャーマンの日常的な社会的役割が十分に記述されていないことや、シャーマン活動の経済的な側面の分析が不足していること、さらにはブリヤートの起源神話と現代において新たに創造された物語との比較など、残された課題もある。しかしながら、モンゴル・ブリヤートを主たる対象に据えながら、シャーマニズム研究をとおしてエスニシティ研究に新たな地平を切り拓いたことは高く評価され、審査委員全員一致で、博士の学位を授与するに値すると判断した。